

『希望の歴史学』を読んで思ったいくつかのこと

井上章一

かつて、網野善彦という歴史家がいた。その戦後、一九五〇年代前半を語ることから、この稿をはじめたい。

一九五〇年の六月には、朝鮮戦争の火蓋がきられている。いわゆる三八度線をはさみ、半島は一九四八年から、南北の二国に分断されていた。以来、両者は紛争をくりかえす。そして、二年後には本格的な戦争へ突入した。

北側をささえたのは、ソビエトであり中国（人民共和国）である。南をあとおしたのは、アメリカであった。占領中の日本は、アメリカ軍がよりどころとする、後方支援の基地になっている。

ソビエト側はそんな日本に、混乱がおこることを期待した。アメリカの軍事行動を、日本の治安悪化でゆさぶることも、くだだてている。

そして、ソビエトは日本国内を攪乱させるよう、日本共産党に要請した。それまでの同党は、占領体制との共存にも知恵をしぼっている。革命勢力の育成、あるいは温存をはかっ

てきた。

そんな姿勢を、朝鮮戦争が目前にせまったソビエトは、非難する。今は、そういう生ぬるいことにかまけている時じゃない。立ちあがって、たたかえ、と。

はっぱをかけられ、日本共産党は武装闘争にふみきっていた。同党の指導をうけた歴史研究者たちも、その方向へ走りだした。若い学究は、山村工作隊に動員されてもいる。

しかし、彼らが工作におよんだ農山村のほうは、これをほとんど相手にしなかった。計画は失敗におわっている。おかげで、精神の荒廃を余儀なくされた学徒も、おおぜいいたと聞く。

当時の網野は、まだ若い。朝鮮戦争をむかえたのは、二二歳の時である。ただ、網野は日本共産党の文化運動をすすめる幹部史家たちと、近いところにいた。そのため、活動の前線にはかりだされていない。むしろ、中枢から号令をかける側にいた。

そんな自分のキャリアを、後年網野はくいるようになる。一九九五年には、「戦後の『戦争犯罪』」という文章も書いている。なかに、こんなくだりがある。

「自らは真に危険な場所に身を置くことなく、会議会議で

日々を過し、口先だけは「革命的」に語り……愚劣な恥ずべき文章を得意然と書いていた、そのころの私自身は、自らの功名のために、人を病や死に追いやった「戦争犯罪人」そのものであったといつてよい。

ずいぶん、廻り途をした。本題にうつる。磯前順一と山本昭宏がまとめた『希望の歴史学』（二〇一八年）を、検討していきたい。

この本は、藤間生大とらませいだいという歴史家の足跡をおいかけている。藤間へのインタビュー、編者たちの藤間論を一冊におさめた本である。藤間じしんが書いた文章も、いくつか収録されている。

藤間は、いわゆる戦後史学をひきいた、その代表的な研究者である。その全貌が見わたせる書物のできたことは、多としたい。大部な一冊をまとめあげた努力も、評価にあたいする。

しかし、そういったことへの社交的な言辭をつづけることは、ひかえよう。ここまで、とどめたい。

さきほど、網野が日本共産党の活動に大きくかかわったことをのべた。山村工作隊などへの指導を、のちには後悔しましたことも、紹介済みである。

じつは、藤間もこれに深く関与した。石母田正や松本新八郎らとならび、リーダーシップをとっている。スターリンの民族論などをふりかざし、若い学徒らをあおったひとりにはかならない。

くりかえすが、この活動は多くの歴史研究者に犠牲をしいた。網野は、そのことを申し訳なく思うと、書いている。しかし、網野以上に指導的であった藤間は、なんら釈明らしい言葉をおこなっていない。

若い学究たちが、研究者としての人生を棒にふってきた。廃人のようになった者もいる。にもかかわらず、そのことをふりかえろうとはしなかった。

私は藤間のことを、ずいぶん心の強い人だったんだなと思っている。悪く言えば、無神経な人だなと、みなしてきた。あれだけ多くの人たちに苦汁をなめさせ、あなたは何も感じないのか、と。

私に藤間へ話を聞く機会があたえられれば、何を聞いてもそのことをたずねたろう。あなたは、あなたたちの指導で人生がだいになした学徒のことを、どう思うのか。あなたの配下にいた網野善彦は、自らをせめさいなんている。こういう網野の懺悔をあなたは、どううけとめるのか、と。

ひょっとしたら、言いかえされるかもしれない。革命に犠牲はつきものだ、と。網野についても、彼はひ弱だからというような答えが、もどってくるのだろうか。あるいは、インタビューじたいが物別れにおわる可能性もある。そんなことを、たずねられる筋合いはない、と。

だが、それでもかまわない。いきなり、席をたれたら、それが藤間生大なんだと、うけとめよう。拒絶の姿勢もまた、人物像をしめす資料になる、と。まあ、大著をまとめようとする磯前らに、その選択肢はなかったような気もするが。

じっさい、この本は私がたずねたいと思っている、その勘所を問うていない。インタビューのみならず、藤間語りの論評でも、そこへの言及をさけている。まあ、あくまでも私に問いただしたいところではかないのだが。

石母田正は、一九五六年ごろに反省の弁をのべていたと記憶する。しかし、網野が頭（うぶ）をたれた部分、「人を病や死に追いやった」件では、口をつぐんでいる。以前は、実証主義をあれどりすぎた。石母田の自己批判は、その一点にとどまっただと思う。

しかも、そのころから石母田は、実証史家とみなされた佐

藤進一に、すりよった。革命運動からしりぞいたあととは、アカデミズムのなかに延命の途をさぐりだしている。

自分がけっきょく見すてた若い学徒のことを、この時、石母田はどう思っていたのだろう。聞けば、磯前は、石母田正の評伝にもいんどんでいるらしい。そちらでは、ぜひこの問題にもわけいってほしいと、思っている。

ねんのため、のべそえる。網野は山村工作隊などの件で、石母田からあやまられたことがあるという。「網野君、悪かった」。そうつけた唯一の当事者で、石母田はあるらしい（網野善彦、小熊英二「人類史的転換期における歴史学と日本」二〇〇一年）。非公式の場で、個人的には網野へ謝罪をするという石母田の振舞も、検討してほしい。

一九六〇年代に藤間は東アジアへ、研究のはばをひろげようとしたり。そこへも磯前らは光をあてている。その延長上にと想ってのことだろう。磯前らは、マルクスの「アジア的」という概念にも、言いおよんでいる。

私にはでる幕のない議論である。マルクスがこの形容で何を言いたかったのかは、よく知らない。ただ、中央アジアの遊牧民を論じた本は、けっこう読んできた。それで想うことがあり、ここへも書きつける。

遊牧の民は、家畜のたべる草をもとめて、季節ごとに移動する。定住はしない。土地所有へのこだわりは、希薄である。自分の土地へこもり、その管理に血道をあげる精神は、めばえにくい。土地の所有権を媒介とする封建制のしくみも、遊牧社会では成立しなかった。

封建制ができるのは、農耕を基本とする社会である。自分の土地をまもり、農耕にいそしもうとする人びとこそが、このしくみをはぐくんできた。じじつ、農耕のさかえたユーラシアの東端と西端では、封建制がなりたっている。

もちろん、ヨーロッパと東アジアのそれには、大きなちがいもあったろう。しかし、封建制がありえぬ遊牧民の中央アジアからは、どちらもよく似ている。ヨーロッパと東アジアは、同じような歴史をへてきたと考える。

マルクス主義は、世界に共通する発展段階を想定する。あらゆる社会は、以下のようなコースをたどると、みなしてきた。すなわち、古代の奴隸制は中世の封建制Ⅱ農奴制をへて、近代の資本制にいたると。

だが、中央アジアの遊牧民に、封建制はなじまない。農耕をいとままないから、土地にしばりつけられた農奴も、出現しなかった。マルクス主義歴史学のいう中世封建制Ⅱ農奴制

が、ここにはあらわれない。中央アジアでは、その公式にあてはまらぬ歴史が、くりひろげられてきた。まあ、マルクスの「アジア的」が、そこを射程にいれていたのか否かは、知らないが。

かつて、江上波夫は日本の五世紀に騎馬民族国家が形成されたこと、主張した。今の学界では、おおむね否定されている。しかし、中央アジアでは、馬にまたがる遊牧民が、しばしば国家を形づくってきた。その幻影を、江上は日本の国家建設史に投影したのである。あるいは、これをもてはやした読者人たちも。

いっぽう、網野善彦も、封建制にからめとられない人民像を、日本史に想定した。非農業民の存在感を強調する日本史像に、いどんでいる。これも、学界の支持をとりつけたとは、言いがたい。しかし、読書人の共感も獲得した。

どうやら、二〇世紀後半以後の読書界には遊牧的歴史観へのあこがれがあるらしい。中央アジアでならなりたつ、土地にしばられない歴史への憧憬が。いつか、その精神的な読み解きに、いどんでみたいものである。磯前らの本には、いいヒントをもらったと思っている。

(国際日本文化研究センター教授)